

【ガルパン】名探偵西住 殿 IV号戦車消失事件

夏鳥 至

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

密室の戦車倉庫からIV号戦車が消えた!?

ガールズ&パンツァーのミステリー二次SSです。

全5話

目次

第1話	事件です！	1
第2話	捜査会議です！	13
第3話	密室トリックです！	25
第4話	紛糾です！	37
第5話	解決です！	49

第1話 事件です！

広い戦車倉庫はスポットライトのように天井からの光で一ヶ所だけが照らされる他は夜の闇に沈んでいた。

その中を金属が触れ合い軋み叩かれる音が響く。

大洗高校戦車道アリクイさんチームであり自動車部でもある四人がいつものように夜を徹して戦車の修理を行っていた。

「は〜い、よちよち。ご機嫌治りまちたね〜」

「ナカジマ、また赤ちゃん言葉出てる」

「え？本当？ホシノ」「出てたねー。な、ツチャ」

「そりやあもうバリバリです。ね、スズキ先輩」

「聞いているこつちが恥ずかしくなるぐらいだったね」

そんな会話をしながら彼女たちは手を止めることなく修理を続ける。その手際はもはやプロ並みだ。

「そろそろ時間ヤバくない？」手を止めて腕時計を見るナカジマ。「ゲッ、9時半過ぎてる」

「明日から臨海学校で学校入れないから今日中に修理しないとイケないのに〜」ツチャの細い目が吊りあがる、

「ちやちやつと済ませるよ! 皆スピード上げて!」激を飛ばすホシノ。

四人の修理の手は人間技を越え、ボロボロだった戦車が瞬く間に綺麗になっていく。
——そして。

「「「終わったーっ!」」」

ナカジマが再び腕時計を確認するとPM9:53。全ての戦車の修理が完了した。

もちろん、この後に不可能と思われる状況から“消失”したIV号戦車もそこにはあつた。

「それじゃあ撤収!」

ナカジマの号令の元、自動車部メンバーは戦車倉庫を去っていった。

※ ※ ※

「ねえ、やっぱり風紀委員が夜の学校を見回りするのって違うんじゃないかなあ? ソド子」

ゴモ代こと後藤モヨ子は震えながら前に行く風紀委員相談役の制服を掴んだ。

「ち、違わないわよ! 学校に不審者が立ち入らないようにするもの風紀の仕事よ!」

ソド子こと園みどり子は断言しつつも若干声が震え、恐さを隠し切れていない。

「それは警備員さんの仕事じゃないかなあ」

パゾ美こと金春希美は一人だけ恐がる様子もなく先頭を歩く。

「ちよつと！パゾ美！早いわよ！」

ソド子は怒りながらもパゾ美の左手に繋いだ両手をより強く握る。

風紀委員のカモさんチームは三つのおかつぱ頭を団子状態に繋げて校内を進んでいく。

三人はおどおどと歩き戦車倉庫の前に辿り着いた。

「次はここだね」

パゾ美が馴染みの戦車倉庫の前に足を止め、倉庫の扉を開ける。

日中は多くの戦車道仲間で騒がしい場所も、夜は闇と静寂に沈んで違うものに見える。
た。

「IV号、ヘッツァー、八九式、三突、Blb is、ポルシエティーガー、Ⅲ式中戦車、M3リー、全部揃ってるわね」

一つ一つ指さし点検を行うソド子にパゾ美がツッコミを入れる。

「いや、誰も盗まないから」

「分らないでしょ？鹵獲が得意な学校だつてあるのよ？」

「継続高校さんの事を悪く言うのはやめようよ。助けてもらったんだから」

「ゴモ代、あえて出さなかった高校名を言わないで……」

頭を抱えるソド子。ゴモ代はしまったと口を手をふさいだ。

「……も鍵を閉めておくの?」

パゾ美の質問にソド子は「当然」と鍵束を取り出した。

戦車倉庫のタグがついた太い鍵を選び出す。

戦車倉庫の扉が閉じられ、ガチャリと音を立てて施錠が完了した。

ソド子が大洗高校のマークが印された懐中時計を取り出し時間を確かめる。

「午後10時5分、施錠確認つと」

※ ※ ※

それから3日後の夕方。

大洗女子高校のあまたある年中行事の一つ二泊三日の臨海学校が終わり、生徒たちは一旦学校に集められた後、生徒会長長の五十鈴華の「それでは皆さん、怪我の無いよう帰りましょう」という短い言葉で解散した。

「終わった……疲れた……」

生徒会室に入るやいなや新生徒会広報・武部沙織は一人掛けソファに座り、目の前のテーブルに突っ伏した。

「臨海学校のついでに泥んこプロレス大会と遠泳大会とスイカ割り選手権と花火大会ま

でやりましたからね」

前生徒会から引き継がれた無茶な数の行事をタイムスケジュールに組んだのは新生徒会書記・秋山優花里だった。

戦車道チームの仲間の協力もあり何とか全ての行事をこなし、さすがの彼女もグロツキー気味だ。

「私も寝る」生徒会でもないのに冷泉麻子もソファーに体を横にした。

「あんたは何もしてないでしょ」沙織がすかさず返す。

「あらあら、皆さん、はしたないですよ」言いながら華も心労と疲労を隠せず生徒会長の椅子に体を預ける。

そんな疲労困憊（1名を除き）のあんこうチームのメンバーに給湯室からお茶を持ってきたのは、戦車道隊長の西住みほだ。

「みんな、お疲れさま」

「そ、そんな！西住殿にお茶を持ってきて頂くなんて！」

みほに心酔する優花里が体をしゃちほこばらせる。

「大丈夫、これぐらいやるよ。それより、みんな、新しく生徒会になってすぐにここまで出来るって凄い！」

「うえへへ〜西住殿に褒められちゃいました〜」

テーブルにお茶と干し芋とみつだんごを並べ、みほは自分も一つ干し芋を頬張った。

「でも、色々イベントあって私もちよっと疲れちゃったから、今日の戦車道の練習はやめておこうか?」

「それはいけませんっ!!」

優花里がいきなり立ち上がり、握りこぶしを掲げる。

「戦車道は一日にしてならず!ただでさえ2日間練習できなかつたんです!今日から始めるべきです!さもないと・・・」

「さもないと?」

優花里がググツと顔を近づけた迫力に押され、みほは逃げるように体を反らした。

「戦車成分が足りなくて私が死んでしまいますううう」

「あ、あはは・・・」

優花里は涙を浮かべているがみほは苦笑いだ。

「でも気分転換にもよろしいかもしれませぬ」

いつの間にか生徒会長の椅子から皆の座るソファへと近づき、みつだんご3本を食べ終えていた華が言った。

「そうかな?」

「そうだよ!バーンと主砲撃ってむしゃくしゃした気持ちもどつかにやろう!」

乗り気ではないみほに対し沙織はノリノリだ。

「武部殿、どうして怒ってらっしやるんですか？」

小声の優花里の問いに麻子が目をあけて答える。

「臨海学校中に他校の男子とバケーションでの出会いを期待してたけど、ウチの高校以外誰もいなかったからだろ」

なるほど、と声には出さず納得する優花里。

「でも、みんな疲れてるのに無理して怪我でもしたら……」

みほが口にした瞬間。

バーーーーーッッッ!!

けたたましい音を立て突然、生徒会室の扉が勢いよく開いた。

大野あや「せんばーい、戦車乗らせてくださいーい」

宇津木優季「やつぱり私たち、戦車が恋人、みたいなの？」

山郷あゆみ「戦車に乗らないと一日が終わった気がしなくて」

丸山桂利奈「かつとばすぞー」

澤梓「みんな、もうちよつと静かに！」

丸山紗希「……」

一年生のウサギさんチームがわちゃわちゃと入ってきた。

「え、ウサギさんも?」

驚くみほ。さらに。

磯部典子「西住さん! 戦車の練習しましょう!」

近藤妙子「キャプテンが練習してくてウズウズしてるんです」

河西忍「私たちも練習したくてたまりません」

佐々木あけび「練習を! どうか練習させてください!」

元バレー部のアヒルさんチームも気合いを入れて飛び込んでくる。

おりよう「頼もう!」

左衛門佐「生徒会長殿に申し上げたき儀がござる」

カエサル「どうか我々に戦車の練習をさせて欲しい」

エルヴィン「戦車に乗る事こそ砂漠の狐の本分」

歴女のカバさんチームも生徒会室に乗りこんできた。

ねこにやー「や、やっぱりゲームだけじゃなくてリアルな戦車もプレイしたいにやー」

びよたん「戦車道が無いとウチら引きこもりだぴよ」

ももがー「それだけは、それだけは回避するもも」

ゲームのアクリイさんチームが後ろに隠れて侵入している。

「みんな……」

皆のやる気を見たみほは笑顔を浮かべた。

「こりや、やるしかないね〜」

生徒会室の扉の所に姿を現した小さな影。元生徒会長・角谷杏がニヤニヤしながら言った。

「会長！」振り返る全員に「元、ね」と訂正を入れる杏。

「お前たち！自主的に練習に励もうなんて！よくぞ！よくぞ！ここまで成長してくれた！」

号泣する河島桃に「桃ちゃん、泣きすぎ」とハンカチを貸す小山柚子。

元生徒会のカメさんチームも揃い、室内は満員状態だ。

「それでは皆さん、練習に行きましょう」

ザワついた中をみほの声を通り、一気に場が落ち着く。

「パンツァー・フォー!!」

「オオオーツ!!」

みほの掛け声一番、全員が腕を振り上げた。

華が貸出簿を記入して職員室から借りた戦車倉庫の鍵を持ち向かう途中、カメさんチームとレオポンさんチームも参加し、結局、大洗女子高校戦車道チームの全員が戦車倉庫の前に揃った。

華が鍵穴に鍵を差して回し——ガチャリ。重い音と共に施錠が解かれた。扉がゆつくりと開いていくと歓声があがる。

——しかし。

「……あれ?ない」

みほのつぶやきの通り、倉庫内にIV号戦車の姿は影も形も無かった。

「奥に停めたんだっけ?」

確認する沙織に麻子が首を振る。

「一番手前に停めた。それよりなにより、あそこだけ不自然に間が空いてるだろ」

言葉通り、整然と並べられた戦車の中、一ヶ所だけ戦車一台分の間隔があいていた。

「そんな!私の大切なIV号戦車が盗まれたってことですか?!」

何よりも戦車を愛する優花里が顔を蒼ざめさせる。

「そんな……」

ソド子がふらふらとIV号戦車のあった場所へと近づいていく。

「10日にはあったのに……」

「それは本当か?ソド子?」

麻子の問いかけにいつもなら「私は園みどり子!」と訂正するソド子が言い返すことなく頷く。

ゴモ代も何度も首を縦に振り「あの時は確かにあったのに」

パゾ美もそれに同調して「10日の午後10時頃には絶対にありました」

「えっ!?!10日!?!」

アrikuiさんチームのナカジマが大きな声を上げた。

「私たち自動車部で、10日の午後9時50分頃まで戦車の修理してたよ!」

他の自動車部メンバーも頷く。

「あなたたち! そんな時間まで校内に残るのは校則違反よ!」

ソド子がアrikuiさんチーム4人を指さす。

「戦車の修理をしてくれてるんだから、それぐらい見逃してあげればいいんじゃない」

パゾ美の反論にソド子が「ぐぬぬ」と声を詰まらせた。

「話を整理しますね。つまりIV号が盗まれたのは10日以降……」

みほが考えをまとめながら呟く。

そこに意外な方向から意外な言葉が入った。

「それはおかしいです、西住さん」

華が手に握っている戦車倉庫の鍵をみほに差し出して見せる。

「この鍵は臨海学校の間、誰にも借りられていません。先ほど貸出簿に記入した時に確認しました」

「他に鍵は無いの?」

沙織の問いに華は顔を曇らせ答える。

「風紀委員の皆さんに見回り用に1つ。他にはありません」

「そして、風紀委員は私たちと一緒に林間学校に参加していた」

麻子の確認にカモさんチームは肯定の領きを返す。

「だから風紀委員の鍵も使えない」

「えっ?それじゃあ……」

みほは戦車倉庫をぐるりと見回して、明確になった謎を言葉にした。

「鍵が閉められていた戦車倉庫からIV号が消えちゃったってこと?」

つづく

第2話 捜査会議です！

「というわけで、捜査会議を始めます！」

どこからか用意した鹿撃ち帽を被りパイプ（もちろんチヨコ製）を啜えた探偵セツトを完全装備して優花里が宣言した。

「本格的だね………無駄に」

「よろしいじゃありませんか。まずは形から入るのも」

沙織と華の言葉に「いや！」と割って入る声。

「鹿撃ち帽にパイプというホームズのアイコンは挿絵作家が作り出したもので、原典にはそういう表現はない！」

立ち上がって珍しくテンション高く言いきった麻子に皆が圧倒された。

「麻子さん、シャーロック・ホームズ好きだったんだ」

みほだけは変な所に感心している。

「いや、そういう訳ではないんだが………」

顔を赤らめて麻子は再び椅子に座った。

「えーっと、話を戻しますね」

生徒会権限で借りた会議室に集められた戦車道チーム全員に優花里が説明を始めた。

「今日、臨海学校から帰ってきたら、戦車倉庫からIV号戦車が姿を消していました」

ホワイトボードの下の方に13日17:00と書き入れる。

「戦車倉庫にIV号があるのを最後に見たのは風紀委員の皆さんです。これが10日の午後10時5分」

今度は中央にカモさんチームのマークを描き、その横に10日22:05と書いていく。

「先程、秋山さんと一緒に鍵の貸出簿をもう一度確認しましたが、11日から13日の間、誰にも戦車倉庫の鍵は借りられていませんでした」

華は戦車倉庫の鍵を握り優花里に頷く。

「倉庫の鍵はもう一本だけ。それを持っていたのは風紀委員の皆さんですが、三人とも臨海学校に参加されていました。その間、鍵が盗まれるような事はありませんか?」

優花里の質問にソド子・ゴモ代・パゾ美が揃っておかつぱ頭を横に振る。

「私が責任を持って肌身離さないでいたわ」胸を張るソド子。

「そして今日、私が鍵をお借りして、扉を開錠して開けたら、IV号が無くなっていた。あらあら、これはどういう事でしょう?」

華は頬に手を当てて首をかしげた。

「鍵の閉まっていた倉庫からIV号が忽然と消えていたのです。つまりこれは「密室からの消失事件！」

とっておきのセリフを麻子が横取りしたせいで、優花里はガクツと崩れ落ちた。

「そういうば麻子、よく本読んでるから、ミステリーとかも好きだったっけ」

沙織が言うのと麻子は「まあ、一応」と隠れた趣味を自らバラした恥ずかしさに沈んでいる。

「だったら麻子がこの事件、解決しちやいなよ！名探偵みたく！カツコいいじゃん、それ」

沙織の煽りに麻子はまんざらでもない様子だ。

「じゃあ早速捜査を始めよう！」

「……それは面倒臭い」

ガタツ！全員がずっこけた。

「何でよく！麻子だつて名探偵やってみたいんでしょ？」

「私はアームチェア・デテイクタイプが好きなんだ」

何それ、と聞く沙織に優花里が解説する。

「アームチェア・デテイクタイプ。日本語にすると安楽椅子探偵。つまり、捜査は警察や助手に任せて自分は推理だけする探偵のことです」

「自分では動きたくないってこと?」

沙織の冷ややかな目にも麻子は指と脚を前で組んで動じる気配はない。

「あんた、やる気あるんでしょうね?」

「もちろんだ。既にいくつか仮説を思いついている」

「えっ? 本当?」

沙織はぐつと両手を握って目を輝かせた。

「私の推理を検証していけば、いずれ真実に辿り着ける」

麻子是不敵に笑い、とっておきの言葉を放った。

「不可能を消去していつて最後に残ったものが、いかに奇妙であつても真実なんだ」

「まずは最初に言っておきたい」

さつきはホームズアイコンを否定していたのに、いつの間にか優花里に鹿撃ち帽を借りた麻子はゆっくりと全員を見回した。

「犯人はおそらく、私たち戦車道履修者の中にいる」

「ええっ!!」と驚きの声が会議室の中を埋め尽くした。

「何ですよ! 麻子は仲間を疑うの!?!」

一番大きなリアクションをした沙織が反発した。

「そもそも普通の人々が戦車を盗もうなんて発想するか?」

沙織はふくれっ面で何も返せない。

「しないだろ。それにIV号を盗むことができたつてことは、動かすことができたつてことだ。そんなこと戦車道履修者以外できるか？」

「それは……確かにそうかも」

頷いて納得の声を上げる澤梓とは異なり、沙織は膨れっ面で麻子に言い返す。

「自分はマニュアル見てすぐ運転できたじゃん」

「いやいや、そんなことできるの麻子さんだから。西住流《ウチ》の道場でもマニュアル見ただけで動かさせた人はいなかったな、さすがに」

みほが苦笑いを浮かべて言った。

「犯人はこの中にいる。その前提で推理を進めていきたい。反論は？」

シーン、と誰も反論を出さない。

「じゃあ、最初に確認しておきたいことがある。カモさんチーム、前に来てくれ」「なんで私たちが疑われなくちゃいけないのよ！」

ソド子が文句を言う。風紀委員の3人が揃って会議室の前方に並べられた。

「疑っている訳じゃない。確認だ。ソド子は臨海学校の間、戦車倉庫の鍵を肌身離さず持っていた。間違いないな？」

「当然でしょ！」ソド子は鍵束を取り出しジャラリと掲げる。

「ソド子はずっと鍵を持ってたよ」

「うん、間違いない」

ゴモ代とパゾ美が言う、「ふふーん、どうよ!」とソド子は得意満面の顔だ。

「ええ、でもそれって、風紀委員全員で嘘ついてたら意味無くないですか?」

「風紀委員全員が共犯、とか♪」

大野あやと宇津木優季の指摘に「何よ! 私たちが嘘をついてるって言うの!」と怒るソド子。

「それはあり得ない」

麻子が断言した。

「嘘をつくなら夜の見回りの時に鍵をかけ忘れたと言えればいい。そうすれば密室になんてならないで、誰でもIV号を持ち出せるから、自分たちに疑いがかからないで済む」

「冷泉さん……」

自分のピンチを助けてくれた麻子にソド子は感謝の目を向けた。

「ソド子、鍵を近くで見たいから貸してくれ」

ソド子は頷いて鍵束を預ける。麻子はその中から一つを選び出し、

「これが戦車倉庫の鍵か。五十鈴さん、同じかどうか確認したい。そっちの鍵も見せてくれ」

「はい、どうぞ」

麻子の両手に一つずつ握られた鍵。それは全く同じ形をしていた。

「間違いないく同じものですね」

優花里が言うのと、全員が賛同の声を上げて頷いた。

「かなり特殊な鍵だな。複製するにしても数日かかるだろう」

「へえー。冷泉さん、見ただけで分かるなんて凄いね」

麻子の観察眼に小山柚子が称賛の声を上げた。

「確かに、その鍵は特注で、複製するには一週間ぐらいかかるって聞いたな」

参謀の威厳を発して情報を付け加える河嶋桃。

「そんな長い時間、鍵が無くなっているのが誰にもバレないなんて事はありえない。つ

まり鍵の複製はされていないということだ」

麻子は鍵束を掲げてソド子に見せる。

「ソド子、この鍵束は本当に臨海学校の間、肌身離さず持っていたのか？」

「もちろんよ！寝る時もずっと持っていたわ！」

麻子の問いにソド子は胸を叩いて答えた。

「お風呂の時も？」

「え？それは……」

自信満々だったソド子の態度がいきなり変わった。その反応を見て麻子は察した様子で、

「びよたんさん、確認したい事がある。前に来てくれ」

「な、なんだびよ?」

「ボ、ボクたちが晒し者になるなんて……」

「普段注目をあびないから、皆の視線が痛いもも……」

びよたんだけ指名されたはずが、アクリクさんチームが互いを押し出すようにして前に出てきた。

「臨海学校のお風呂はクラスごとだった。そしてソド子と同じクラスの3年生はびよたんさんだけ。間違いないな?」

「そ、そうだったっや」

麻子は全員に見せるように、鍵についたタグを掲げた。そこには『戦車倉庫』と記されている。

「例えば、戦車倉庫の鍵に似たものを用意して、タグを付け替える。または、タグも似たものを作ってもいい。そうして、ソド子がお風呂に入っている間に本物の鍵と入れ替える。これなら、臨海学校の間でもこの鍵は使える」

「ええっ? そんなことウチがやったって?」

少し涙目のびよたんに「可能性の問題だ」とさりとて言い放つ麻子。

しかし。「意義ありっ！だにゃー!!」

某裁判ゲームのごとくねこにゃーが指をつきつけた。

「びよたんは臨海学校の間、クラスの人と一緒に風呂に入っていないんだにゃー！」

麻子もそれに乗っかって「なにいいい！」と派手なやられモーションをとる。

「お風呂は毎日に入らないと汗臭くなってしまうぞ！」

「さすがに女子高生が2日間もお風呂に入らないのはどうかと……」

「私たちなんてシャワー込みで1日5回は入ってますよ」

磯部典子・佐々木あけび・近藤妙子の的を外れた発言に「いやいや、そういうことじゃ

なくて」とツツコミを入れる河西忍。

「お、お風呂には毎日入ってたびよ。ただ、クラスの人と一緒にじゃなくて、アクリクイさん

チームで入ってたんだっちゃ」

「何でよ！ちゃんと決まった通りクラスの人と入らないといけないでしょ！」

規律を守る風紀委員の使命を暴走させるソド子をゴモ代とパゾ美が抑える。

「だって、3人でゲームしてたらついついクラスの入浴時間過ぎちゃって……」

「だから、皆が寝静まった後、こっそり3人で入ったもも」

「つまり、びよたんに鍵のすり替えは不可能だにゃー」

はっはっは、と声を合わせて得意がるアリクイさんチーム。一方。

「そ、そんな……。私もあろう者が、お風呂に入っていないクラスメイトがいた事に気付かなかったなんて……。一生の不覚……」

orzの姿勢でズーンと落ち込むソド子。

「と、とりあえず話を元に戻そうか」

脱線しそうな所をみほがまとめる。

「お風呂の間に鍵を付け替える事はできなかった。だからびよたんさんは犯人じゃない」

アリクイさんチームが席に戻ったところで沙織が「ハイ!ハイ!」と手を上げた。

「他に鍵を付け替えられるタイミングは無かったの?」

「確か、泥んこプロレス大会の時は、風紀委員の皆さんはレフリーをやってましたね」

臨海学校のしおりを確認しながら優花里が言う。

「レフリーの衣装なら鍵束を持てますね。プロレスの衣装なら持てなかったと思ったんですが」

「会長のプロレスの衣装、きまっておられました!」

「ありがと、かーしま。でも今はその話は置いておこうな」

河島桃の脱線を角谷杏が強引に戻した。

「遠泳大会の時は、ソド子さんは記録員をされてました」

優花里の発言に麻子は怒りをあらわにした。

「他人には泳ぐよう命令しておいて自分だけ楽しんでたのか!」

「ち、違うわよ!」

「じゃあ何だ!」

「あ、足がつかない所で泳ぐのが怖いのだ!」

「それは………すまん」麻子のボルテージが一気にMAXから0へと下がる。

優花里は「話を戻しまして」とジエスチャーを挟んだ。

「ソド子さんは水着ではなく制服のままなので鍵束は持っていました。最後に花火大会です。生徒全員が浴衣に着替えたので、その際にならすり替えるタイミングがあつたかもしれません」

「浴衣に着替えたときも、ちゃんと持ってたわよ!」

ソド子はタブレットを操作して写真を表示させた。

そこには浴衣姿のソド子が写っていて、帯にしつかりと鍵束がぶら下がっていた。

「これでは鍵のすり替えのタイミングは無い、ということですね」

優花里の台詞に笠にかかってソド子はふてぶてしく言い放った。

「どうよ! 風紀委員の仕事は完璧でしょ!?!」

「そうだな。これで一つ可能性が消えた」

麻子はホワイトボードに「風紀委員の鍵」と書き記し、上から二重線を入れた。

その表情は「だんだん面白くなってきた」と言わんばかりに笑みを抑えられていない。

「じゃあ、次の仮説に行くか」

つづく

第3話 密室トリックです！

「冷泉さん、コピーならよろしいとの事でした」

華の手の中には職員室から持ってきた鍵の貸出簿のコピーが握られていた。

先程、麻子の依頼で華に鍵の貸出簿を持ってきてほしいと言われ、生徒会長権限で貰って来たものだ。

「現物は借りられないか。そりやそうだな」

麻子はひとりごちながら会議室内を一瞥した。

「10日に戦車倉庫の鍵を借りたのは一人だけ、か。澤さん、前に来てもらえるか？」

アrikイさんチーム同様、澤梓にくつついてウサギさんチーム全員が揃って出て来た。

「な、何でしようか……」

オドオドする澤梓だが、他の一年生たちは、

「ウチのリーダーを疑うんですか！」

「新生徒会もおーぼー！」

「梓、私たちは絶対にあなたの味方だからね」

「黙秘権を使ってやる! 弁護士を呼べ!」

「.....」

ワチャワチャと強気だ。

「この職員室の貸出簿によれば、10日に戦車倉庫の鍵を借りたのは澤さんだが、間違いないか?」

「はい」

「粹、自分から鍵を借りに行くなんて、責任感っていうのが出てきたよね」

「やめてよ! あや!」

「でも、10日に鍵を借りた事と、その後に戦車が盗まれた事が関係あるんですか?」

山郷あゆみの問いに麻子が頷き、鍵の貸出簿のコピーを見せた。

「貸出簿の表記は『十日』。つまり10日以降に借りて一旦その日付を記入し、後で気付かれないよう一の桁の数字を消す」

麻子は紙にシャーペンで『十一日』と書いた後、消しゴムで『一』を消した。

「こうすれば記録上は10日に借りたように見せかけられる。貸出簿には時刻を記入する欄が無い事を利用したトリックだ」

「なるほど〜!」

「優季ちゃんはどつちの味方なの!」

手をポンと打った宇津木優季に坂口桂利奈がムスつとお冠だ。

「確か、貸出簿に書く時ボールペン使ったよ。簡単に訂正されないように気をつけてるんじゃない？」

ナカジマのもつともな言い分に1年生たちが揃って頷く。

「じゃあ消えるペンを使ったとか？」

「さすがにそれは無理だろ」

「小学生の推理クイズじゃないんだから」

ツチャとホシノとスズキの掛け合いをスルーして、

「だったら、偽の貸出簿を作って、記入する時にすり替えた、という仮説もある」

麻子の言葉にねこにやーがガタリと立ち上がった。

「ジェバンニが一晩でやりました！」

某漫画の有名なセリフに皆がポカんとする。ねこにやーは「ゴメンナサイ……」と俯いて席に戻った。

「でも、麻子さん。こうしてコピーでしか頂けないのですから、本物は職員室から持ち出せないでしょう。そっくり同じ物を作るのは無理があるのでは？」

華が麻子の手のコピー用紙を手に取り言った。

「新会長は梓の味方してくれるんですか！」

「さすが新会長〜」

「新会長に選ばれるだけのことはありますね」

「よっ! 五十鈴新会長!」

ウサギさんチームに新会長を連呼され、「あらあら」と華は照れた様子だ。

と、その時、ずっと黙っていた丸山紗希が澤梓に何やら耳打ちした。

「そっか! 紗希、頭いい!」

澤梓は丸山紗希の肩をガツシリ掴んだ後、対峙するように麻子の方に体を向けた。

「あの、冷泉先輩。いいですか」

先ほどまでオドオドしていた澤梓だが、うって変わって落ち着いた様子で反論する。

「戦車倉庫の鍵を借りた時に貸出簿を記入したのは、私たちじゃなくて先生なんです。ですから、日付を誤魔化したり、消えるペンを使ったり、偽の貸出簿にすり替えたりできななんです」

仮説を一つ一つ否定していく澤梓の目は、ウサギさんチームを導く頼りがいのあるリーダーの力強さがあつた。

「すっごくいい。梓、かっこいい〜」

さつきは麻子の説に同意していた宇津木優季がコロリと態度を変えて拍手する。

「つまり貸出簿の通り、澤さんが鍵を借りたのは10日だった」

麻子はホワイトボードに「鍵の貸出簿」と書き、上から二重線を入れた。「疑ったようで、悪かった。すまん、謝る」

頭を下げる麻子に澤梓はまたオドオドとなる。

「そ、そんな、顔を上げてください」

「いや、私の気持ち収まらない」

「そんなぁ……」

とといったやりとりがしばらく続いた。

「次の仮説を検証したい」

ウサギさんチームが元の席に戻って落ち着いたところで麻子は言った。

「そもそも戦車倉庫は完全な密室だったのか？という仮説だ」

「完全な？麻子さん、どういう事？」

みほの問いかけに麻子がニヤリと笑みを浮かべて答える。

「ミステリーの定石として、密室が出たら抜け穴をまず疑うべきなんだ」

その言葉に歴女チームが反応した。

「おお！抜け穴！」

「歴史を紐解けば、堅牢な城には抜け穴が用意されているもの！」

「逃げ延びて再起を誓うのも一つの策」

「歴史のロマンゼよ」

しかし、盛り上がる四人に優花里が水を挿す。

「でも、普通の倉庫に抜け穴がありますか?」

「抜け穴のようなもの、でいいんだ。例えば、換気用の窓があるだろ?」

「麻子、換気用の窓からじゃ体が入らないよー」

確かに換気用の窓は通らなそうな沙織の胸を自分のものと見比べて「嫌味か!」と麻子が声を荒げる。

「お前のように出すぎてなければ通れるだろ」

「だとしても、どこから戦車を盗み出すの?人がやつと通れるような窓から?」

「その通りだ」

「ええ〜!無理だよ、そんなの!」

「無理じゃない。それが可能な人たちがこの中にいるだろ?」

麻子は一番前の席の彼女に声をかけた。

「そうだな?レオポンさんチーム」

指名された自動車部の四人が会議室の前に来た。

「いやー。私たちが疑われるとはね〜」

皆の前に立ち、頭を掻きながらナカジマが言う。その隣にはスズキ、ホシノ、ツチヤ

も揃っている。

「すまないな。仮説を検証したいんだ。疑っているわけじゃない」

「分かってるよ」

頭を下げる麻子にナカジマは笑顔で応じる。

「自動車部の技術があれば、IV号戦車をバラバラに解体して換気用の窓から持ち出すことも可能じゃないか？」

「うーん、戦車をバラバラにする、か。考えた事もなかったよ」

ナカジマは困り顔だが、どこかしら楽しそうだ。

「铸造じゃないから解体はできるかもしれないね」

「でもエンジン部分は難しいかな」

「まずは砲身をどうにかしないと」

考えた事も無いIV号戦車解体計画に自動車部の技術者魂が燃え上がる。

そこに「待つて！」と割って入る声。

「冷泉さん。レオポンさんチームの四人も臨海学校に参加していたわよ」

ホラ、とソド子タブレットに写真を表示させて見せた。

送迎のバスに興味津々のツチャ。泥んこプロレスでダブルリアットを決めるスズキとホシノ。遠泳大会で先頭集団の中を泳ぐナカジマ。花火大会で揃いの浴衣を着る

四人。

次々と臨海学校に参加した証拠が映し出される。

「行事の合間に臨海学校を抜け出して戦車を解体したなんて、さすがにありえないでしょ」

ソド子は勝ち誇った様子で満面の笑みを浮かべた。

麻子は悔しそうな顔を見せず、冷静に話を切り替える。

「だったら、戦車は堂々と倉庫の扉から出ていったとしか考えられない。」

「まったくもう！冷泉さん！もう忘れたの！私たちが盗まれる前のIV号を確認して鍵をかけたって言ったでしょ！どうやって扉から出ていくのよ！」

ソド子が腕組みをして憤慨するのに合わせてゴモ代とパゾ美も腕を組む。

「ソド子、お前たちが確認したIV号だが、本当に本物だったか？」

「え？」と風紀委員の三人のおかっぱ頭が揃って傾く。

「IV号の絵や等身大の模型を準備して、既に盗んでおいた本物の代わりに置いておく。

そして風紀委員の見回りの後、換気用の窓から入って夜のうちに解体した。これなら短時間で可能だ」

「影武者を使ったということだな」

「否、空蟬の術でござる」

「ひなちゃん直伝のマカロニ作戦だろ」

「いや、そこはジャスパー・マスケリンじゃないか」

「「それだつ!!」」

歴女たちが第二次世界大戦中に行われた欺瞞作戦について話し合っている間に麻子がソド子に迫った。

「ソド子、お前たちが見たのは間違いなく本物のIV号だったのか？」

「そ、それは、私は目視しただけだから……」

確たることが言えないソド子はたじたじとなる。と、そこへ。

「……あの、私、触ったよ？」

ゴモ代がおそるおそる手を挙げて言った。

「あの見回りの時、たまたまIV号に触ったよ。間違いなく鉄の感触だった」

「よくやったわ!ゴモ代!」

ソド子はご機嫌でゴモ代の背中を叩いた。

「風紀委員が見回りの時に確認したのは本物。つまりIV号は22時の時点まで盗まれていなかった、という事か」

麻子はホワイトボードに「抜け穴」「偽物」と書き、その上から二重線を入れた。

「次はもっと大掛かりな仮説を検証したい。ソド子、この中で臨海学校に参加しなかつ

「たチームがいるか?」

「えっ?ちよつと待って……」

ソド子はタブレットを確認する。

「……アヒルさんチームが参加していないわね」

「私たちはやってません!」

「冤罪です!」

「濡れ衣です!」

「ノットギルティです!」

呼ばれる前にアヒルさんチームの四人が会議室の前に出てきた。

「いいか?お前たち!この苦境も根性があれば跳ね返せる!」

「はいつ!キャプテン!!」

円陣を組んでいるアヒルさんチームに麻子が声をかけた。

「だから、あくまで仮説の一つだ。それも一番実現性の低い可能性のな」

「偽物説もかなり実現性低かったけれど、それ以上なの?」

みほの問いかけに少し躊躇しながら麻子は頷いた。

「小説ならあり得るが、現実にはちよつとな……」

「もう!グダグダしてないでスパッと言っちゃいなよ!」

沙織が発破をかけたことで踏ん切りがついたのか、麻子は重い口を開いた。

「倉庫そのものを解体して、IV号を盗み出した後、再び建てたとしたら？」

「えええ〜っ！そんなのアリ!？」

沙織が大きなを上げた。

「ミステリー小説の中ではアリだ」

「でも、たった四人で倉庫を解体して建て直すって、無理じゃない？」

「……… 四人が主導で他に協力者がいれば不可能とはい切り切れない」

沙織の反論に麻子はちよつと苦しそうに答える。

「ですが、2, 3日では難しいのでは？」

「……… 壁の一部や扉を外すだけでもいい。それなら期間は短くて済む」

華の反論に麻子はより苦しく答える。

「いえ、壁や扉に細工の後は見られませんでした」

「……… だ、だったら天井だ！天井だけ取り外してそこから………」

優花里の反論について麻子の答えが途切れた。

「そこから戦車を盗み出すなんて、大掛かりすぎて無理だよな」

みほの追い打ちに麻子はぐうの音も出ない。

「……… だから実現性が一番低い可能性だつて言ったんだ………」

顔を真っ赤にしてむくれる麻子。一方、疑いの晴れたアヒルさんチームは、

「やりましたね! キャプテン!」

「完全勝利です!」

「ひとつのサービスも取らせませんでした!」

「よくやったぞ! お前たち!」

と自分たちの手柄のように大はしやぎだ。

動こうとしない麻子の代わりに沙織がホワイトボードに「倉庫の解体」と書き、その上から二重線を引いた。

つづく

「いんじゃない?」

「それじゃあ最後の一本が無くなっちゃった時に困るでしょ!だから複製は絶対に必要なの!」

「でも複製している間は倉庫が使えない……あれ?どうすればいいの?」

「三本以上あればいいのよ。そうすれば複製作っている間でも倉庫の開け閉め出来るでしょ!」

「なるほど……」

「あやはバカだな」

「何よー!優季ちゃんだって分かってなかったくせに!」

理解が全員に広まったのを見て麻子が右手の指を三本立てる。

「そう。鍵は最低でも三本は必要なんだ。それじゃあ、もう一本の鍵はどこにあるか?考えられるのは学校の責任者。つまり、学園長」

突然出た意外な人物の名前に全員が驚きの声を上げた。

「でもでも、犯人は私たち戦車道受講者の中にいるんでしょ?」

「学園長先生が自分の学校を廃校から救った戦車を盗んだりしないでしようし」

沙織の発言に頬に手をあてた華も同調する。

「学園長から鍵を借りる事が出来る人物がこの中にいるだろう?なあ、カバさんチーム」

呼ばれたカバさんチームの四人が会議室の前に立ち麻子に対峙する。

「どういう事だ？我々が校長から鍵が借りる事が出来ただって？」

リーダーのカエサルが勢い込んで問いただす。

「ああ。正確に言うと、カバさんチームのおりようさんだ」

「「おりよう!?!」」

エルヴィン・カエサル・左衛門左の声がハモった。

「知らなかったのか？おりようさんは学園長の親戚なんだぞ」

「まさか……そんな関係性があつたなんて……」

驚きに帽子を落とすエルヴィン。

「ブルータス、お前もか」

尊敬する大帝の名言を呟くカエサル。

「獅子身中の虫とはこの事か」

左衛門左は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「いや、待つぜよ。確かに私は校長の親戚だが遠縁だし、鍵を借りるなんて出来ないぞ

！」

おりようは動揺しながらも的確に反論した。

「どういった親戚なんですか？」

華の問いにおりようは「えーつと……」と思ひ出すのに苦勞して顔をしかめる。

「私の母方の祖父が校長の父方の姉と結婚したから……」

「それでは冠婚葬祭で顔を合わせた事があるかどうか、といった関係ですね」

「實際、私が幼稚園生の頃に一度だけ顔を合わせただけで、大洗女子に入ってから親戚関係だと分かつたぐらいぜよ」

「そんな薄い関係で鍵を借りる事ができるでしょうか？」

妙に親戚関係に強い華の疑問に麻子も戸惑いを隠せない様子で、

「私も親戚だと聞いただけで、實際の所は知らなかつたな……でも絶対に借りる事が出来ないときまでは言いきれないが……」

「これはもう学園長本人に確認に行くしかないよ！」

沙織が意気込んで腰を浮かせたところに、

「ちよーっつと待った」

角谷杏の声がその動きを止めた。

「学園長は戦車倉庫の鍵を持っていないよ」

「どうして前会長が断言できるのですか？」

華が聞くとき角谷杏はこどもなげに答えた。

「だって学園長から預かつて生徒会室にあるから」

「「えええーっ！」「」

新生徒会を任された華と優花里と沙織が驚きの声を合わせた。

「あの、聞いていませんよ、そんな事。ねえ？五十鈴殿。武部殿」

優花里の確認に華と沙織が強く頷いた。

「ゴメン、使わないもんだから忘れてた」

謝罪のつもりか角谷杏は手を拝み合わせるが、その口調は軽い。

「そういえば、戦車道を復活させる時に学園長から倉庫の鍵を預かっていたよね」

小山柚子が口元に人差し指を当てて記憶をさくらう。

「戦車道を復活させて学校を廃校から守ってみせると学園長に宣言した会長の雄姿、忘れはしません！」

河島桃は違う記憶を思い出して涙目だ。

「つまり、生徒会役員は戦車倉庫の鍵が使えたという事だな？」

麻子が聞いたです。カバさんチームに代わって今度はカメさんチームが会議室の前に並んだ。

「たしかに私ならなら生徒会室にある鍵が使えたかもしれないけど、持ち出していいよ。なんなら、生徒会室の貴重品をいれる金庫に入っているから、確認して貰ってもいい」

「それじゃあ確認に行ってくださいます！」

「いいや、行かなくていい。秋山さん」

敬礼した優花里を麻子の言葉が止めた。

「生徒会室にある鍵が使われていなくても、以前に複製が作られていた可能性があるから意味無いんだ」

「なんだと！我々を疑うのか！冷泉！」

怒鳴る河島桃を「桃ちゃん、どう、どう」と小山柚子が抑える。

「それを言われると反論しようが無いんだよね」

角谷杏が困り顔で頭を掻く。しかしすぐにその目が不敵に光った。

「でも、生徒会室にある鍵が今使える現生徒会メンバーも同じように疑いがかかるんだよね」

「ええっ？私たちが!？」

沙織がガタリとパイプ椅子を倒して立ち上がった。

「どうして私たちがIV号を盗まなくちゃいけないのよ!？」

「動機を言い出したら、ここにいる誰も盗む動機を持たないはずでしょう?」

小山柚子の反論に言葉を返せず沙織はむくれ顔でパイプ椅子を立て直して座った。

「あのく、貴重品を入れる金庫のことなのですが……」

華が手を上げておぼおぼと言った。

「どういったものなのでしょう？教えて頂けると現生徒会長としては助かるのですが……」

「言葉で説明するより見てもらった方が早いか。かーしま」

「はっ！」答えるが早いか河嶋桃が会議室から駆けていった。

数分後。

「会つ、長つ、こちらつ、ですつ」

40cm程の直方体の見た目にも堅牢な金庫を抱え、息を切らしながら河嶋桃が戻つて来た。

ドン！と重量感ある音と共に金庫は床に置かれた。

「これには貴重品とか外に出しちゃ駄目なアレとか絶対に秘密にしておかなくちゃいけないコレとかが仕舞つてあるのよ」

にこやかな顔で不穏なことを言つてのける小山柚子。

一方、角谷杏は何か気付いた様子で顔をしかめた。

「差し押さえ〜？」

言葉通り、金庫の前面を横切る形で『差し押さえ』と書かれた紙が貼られていた。

「こんなの貼られてたっけ？」

「いいえ。私の知る限り、こんな紙は……」

『差し押さえ』の紙に顔を近づける小山柚子と。

「あっ!!」

思わず漏れた声に両手で口をふさいだ。

「これ、文部科学省学園艦教育局って!」

言う通り、大きな『差し押さえ』の文字の隣に小さく『文部科学省学園艦教育局』と書かれていた。

「あの役人の仕業か〜」

河嶋桃が恨みつらみを込めて片眼鏡を光らせる。

「ちよつと待つてください。それって、いつ張られたものですか?」

みほの問いかけに元生徒会の三人は揃って腕組みして考える。

「いつって、そりゃあ……」

「廃校騒動の時しか無いよね」

「他に役人が生徒会室に入るタイミング無かったからな」

「そんな馬鹿な!」

麻子が慌てて鹿撃ち帽を床に落とした。

「どうしたの? 麻子?」

帽子を拾い上げた沙織に麻子は説明する。

「見ての通り、金庫の前面を横切る紙は扉を封じていて、破らずに開ける事は不可能だ」
麻子の指さす先で『差し押さえ』の紙はしっかりと扉の開け口を横断している。

「つまり、この金庫は夏休みの後から開けられていない。新生徒会の役員選挙があったのはいつだ？」

「夏休みが終わって新学期になってからです！つまり我々新生徒会のメンバーには金庫の中の鍵を使う事は不可能なんです！」

優花里が満面の笑みを浮かべ言い放った。

しかし麻子の表情は冴えない。

「なにか問題でも？冷泉殿？」

「廃校騒動の時に貼られたものにしては古びてないか？」

「言われてみれば確かに……」

よく見るまでもなく、全体的に埃がかぶっていて、紙の端がクリーム色がかっている。

「こんな風になるには半年ぐらいかかると思う。だが、そうすると変なんだ」

「何が？」

沙織の質問に麻子は苦しみの表情を浮かべた。

「今まで動機については無視して考えていたのに変節するようで気がとがめるんだが、前生徒会には動機が無いんだ」

「動機に関しては皆さん持っていないのではありませんか?」

華が聞くと麻子は生徒手帳を取り出し、カレンダーの書かれた箇所を開いて、

「正確に言えば半年前に前生徒会が戦車を盗むための計画を立てていたとは思えないんだよ」

「そっか!夏休みの時と半年前とでは状況が違うんだ」

麻子の考えを読んだようで、みほが納得した声を上げた。

「うん。西住さんが転校してきたから前生徒会は戦車道を復活させようと考えた訳だろ?」

「その通りだ!会長の慧眼により」「かーしま、ストップ」

河嶋桃の脱線を角谷杏が無理やり止めた。

「その時に戦車倉庫の鍵を前生徒会が預かった。半年前って事は、その直後にこの紙が貼られていないと計算が合わない」

麻子は金庫の扉に貼られた紙を撫でる。

「前生徒会は学校存続を戦車道に賭けていたんだ。そんな時、わざわざ戦車を盗み出すために鍵を複製するか?」

廃校を食い止めるため前生徒会がどれほど尽力したかをそれぞれに思い、会議室内が沈黙に落ちた。

「そしてもう一つ。角谷前会長が自分から鍵を預かっている事を言う必要もない」
「まあ、犯人なら自分が戦車倉庫の鍵を使えるなんて言わないね」

他人事のように角谷杏は言った。

「前生徒会が鍵を複製していた説もダメ、と。それで麻子、他の推理は？」

沙織はホワイトボードに『複製の鍵』と書いたのを二重線で消した。

「……………ない」

「へっ？」

「私の推理は以上だ」

「ええ〜っ！それじゃあ誰が犯人か分からないままじゃない！」

非難の声を上げる沙織に麻子はふくれっ面で、

「この短時間で8パターンも考えたんだぞ！」

沙織と麻子の言いあいの中、ホワイトボードをじっと見つめていたみほの様子が変わった。

「もしかして……………」

その目がキラリと鋭い光を放つ。まるで戦車の指揮をしている時のように。

「ソド子さん、時計を見せて貰っていいですか？」

「何？私の時計は正確よ？」

ホラ、とソド子が大洗学園の校章入りの懐中時計を再び取り出す。その針は会議室の時計と同じ時刻をさしていた。

「ナカジマさん、いつもどうやって時間を確認していますか?」

「これだね。電波式デジタル時計。防水も耐衝撃もバッチリだし、GPS機能もついているからラリーレースでも使える代物だよ」

ナカジマは腕時計をみせびらかす。表示されている数字は会議室の時計と同じ時刻だ。

「……やっぱり。間違いない」

「でしよう?」それ見た事かと言わんばかりに胸を張るソド子。

「だろ」自慢の腕時計を皆に見せられたホクホク顔のナカジマ。

「みぼりん、時計がどうしたの?」

沙織の問いかけにみほは「ちよつと考えさせて」と顎に手を当てる。

そして「見回りがあって」や「鍵を借りて」や「修理をして」など呟いた暫しの後。顔を上げると力強い声で宣言した。

「私、分かったかもしれません。IV号がどうやって盗まれたのか」

つつく

第5話 解決です！

夕日が差し込む会議室。西住みほが落ち着きを取り戻した戦車道履修者全メンバーの前に立った。

何故か麻子から「脱帽だ」と渡された鹿撃ち帽をかぶって。

「この事件を考えるには、もつと根本から考え直さなくちゃいけないことがあったんです」

「根本というと、事件が発生した時点ですか？」

「違うの、華さん。私たちには普通すぎて見逃していたことがあるの」

「普通すぎる、と言いますと？」

みほは華から優花里に顔を向けた。

「学校は学園艦の上にあるってこと」

みほの指摘に皆の頭に？が浮かぶ。

「優花里さん、今日は何日だったけ？」

突然の質問に戸惑い、優花里は上ずった声で答えた。

「え？13日ですが……」

「何月?」

「10月です」

「そう。10月13日。それなのに私たちは臨海学校に行つて真夏の行事をしてきたでしよ」

スイカ割り、花火大会、遠泳大会。真新しい記憶がよみがえる。

「どうして秋にそんな事ができたのかな?」

「どうしてつて、常夏の島だったからでしょ?」

「沙織さん、バカンスに来た男子にモテモテになる、なんておっしゃつてましたね」

実際はそんな事はありませんでしたけれど、と言わずもがなの追い打ちをかける華。

「うん。理由は簡単。私たちが常夏の熱帯地域に行つたから」

「はい、そうです。延期されていた真夏の行事を行うため、無理やり熱帯地域で行う事になつたんです」

臨海学校のスケジュールを組んだ優花里が頷く。

みほは「そう、つまり」と言つて全員顔をみ渡した。

「私たちは日本との時差がある地域へ学園艦ごと移動していた」

「日本と時差があると何が違うの?」

沙織の質問にみほは笑みを浮かべて答えた。

「順番が逆になるの。カモさんチームの見回りが先で、レオポンさんチームの戦車修理が後だった」

「あっ!!!」

全員が驚きと理解の入り混じった声を上げた。

「さっきソド子さんの時計を確認したけれど、大洗高校のマークが入っていたでしょ。あれは大洗高校のもの。時刻も当然、大洗のある日本標準時を時間をさしていました」

みほは会議室の時計を振り返って見る。それはソド子がとり出した懐中時計と同じ時刻を刻んでいた。

「そしてナカジマさんが着けている腕時計はGPS付きのデジタル時計です。だから、学園艦が移動した先の現地時刻が表示されていたんです」

ナカジマが自慢の腕時計を見つめ「そっか〜」と呟いた。

「2つの時計が同じなのは、学園艦がいま日本標準時の地域に入っているから。でも、一昨日は違いました」

みほはホワイトボードにあつた3本の棒マグネットにそれぞれポストイットを張り『9日』『10日』『11日』と書き込んだ。

「時間の流れを分かりやすくするために、図にしてみますね」

みほはホワイトボード上に棒マグネットを『9日』『10日』『11日』の順に並べて、

『10日』の下に簡単な日本地図を描いた。そして丸いマグネットをとり出し、「これが学園艦とします」

『学園艦』とポストイットをつけたそれを『9日』の下に貼りつけ、皆の方を向いた。

「風紀委員の皆さんが見回りを行ったのは、この時点。現地時刻では、まだ9日でした」説明しながら、みほはソド子の持っていた懐中時計と日本地図の上の『10日』を指さす。

「でも、その懐中時計の時間は日本標準時です。だから風紀委員の皆さんは10月10日の午後10時過ぎに見回りを行ったと認識したんです」

「私たち、時計に囚われ過ぎていたのね」愕然とするゴモ代。

「正確すぎるのも考えものね」自戒の声を呟くパゾ美。

みほは説明が皆に伝わったのを見てから、棒マグネットをスライドさせた。日本地図と『学園艦』が『10日』の下になる。

「そして時間が経過して、澤さんが職員室で鍵を借りたのが、この時点です」

「……でも、私、どうして時間のズレに気付かなかったんだろう?」

澤梓の自らへの疑問にみほが頷いて答える。

「それは、貸出簿には時刻を書く欄が無かったからだよ。だから現地時刻と日本時刻が同じ10日なら先生が貸出簿を書いていても気付かなかった」

「なるほど〜！」澤梓が手をポンと叩いて納得を言葉にした。

「その後、戦車道の練習を行い、終わった後で自動車部の皆さんが戦車の修理を行ってくださいました」

もう一度みほは棒マグネットをスライドさせる。今度は日本地図が『11日』の下に、『学園艦』が『10日』の下になった。

「そして修理が終わったのが、この時点だったんです」

辻褄のあつたみほの推理に、ため息にも似た関心の声が皆の口から洩れる。

しかし、独りだけ納得できていないソド子が立つて声を上げた。

「でもよ〜どうして自動車部は戦車倉庫の壁掛け時計を見なかったのよ！そうすれば時間のずれに気付いて密室なんて騒ぎにならなかつたじゃない！」

「いや〜、見つかったら面倒だから、明かりを一つしか付けて無かつたんだよね。壁掛け時計が見える明るさじゃなかつたから、腕時計しか見てなかつたんだ」

ナカジマが冷や汗をかきながら言い訳すると、ソド子は「面倒って何よ！」と更にポルテージを上げる。

「レオポンさんチームの皆さんに聞きたいんですけど、戦車の修理が終わった後って、倉庫の鍵はどうしましたか？」

みほの問いかけにナカジマ、ホシノ、スズキ、ツチャヤが揃って気まずい表情を浮かべ

た。

「まさか貴女たち、鍵をかけてないの!？」

「いや、焦ってたから忘れちゃったかも」

「忘れちゃったじゃないでしょ！」

ついに堪忍袋の緒が切れたソド子のお小言がレオポンさんチームの四人に降り注ぐ中、独り頭を抱えた麻子が呟いた。

「密室トリックじゃなくてアリバイトリックだったのか……そっちか……」

気付かなかったことが相当悔しい様子で、何度も「不覚だ」と繰り返す。

「その後、戦車倉庫の鍵は閉められることなく、私たちは臨海学校に参加しました。ですから、誰にでもIV号は盗めたんです」

あつけない真相に誰もが声を出すことすらできずに、みほの推理を飲み込む事しかできなかつた。

「犯人にとつても、『密室』になるなんて事は予想外だったはずですよ。風紀委員の皆さんと自動車部の皆さんの時間の認識のずれを把握できる人なんて誰もいませんから」

「あれ？西住殿、もしかして、犯人も既に確定されているのですか？」

優花里の問いかけに「多分だけど」とみほが頷く。

「凄いです！本当に西住殿は名探偵です！」

優花里が目を輝かせて賛辞を浴びせるのを落ち着かせるのに、しばしの時間がかかった後。

「ちよつと待て西住。今日来た時は戦車倉庫の鍵はかかっていただろ」

河嶋桃の指摘にみほは少し考え、

「私たちが臨海学校に行っている間に先生が見回りをして、職員室にある鍵で閉めてくれたんじゃないでしょうか」

「成程、その時には倉庫の中までは確認していなかった。だからIV号が盗まれている事に気付かなかつた、という訳か」

「いや、それはどうかな。かーしま」

角谷杏が右手に持った干し芋を振って河嶋桃の発言に食いつく。

「いくらウチの学校が緩いとは言つても、見回りの時に中を確認しないって事は無いだろう。もし人が残つてたら大変でしょ?」

「会長おとお」と涙目になる河嶋桃をスルーして小山柚子が首をかしげる。

「あれ?それだとおかしいよね?中を確認したらIV号が盗まれていることが分かるはずなのよ」

「もしかして、戦車にうとい先生で、気付かなかつた、とか?」

宇津木優季がポワポワした声で言ったが、澤梓がすかさずツツコミを入れる。

「皆、元氣してる?」

「蝶野教官!」

全員の声が揃って口があんぐり開いた。

「蝶野さん、IV号を盗っていったのは貴女ですね」

みほの指摘に蝶野亜美はカラカラと笑ってから答えた。

「盗ったなんて人聞きの悪い。この前、大洗女子に来た時にIV号を見て、久しぶりに動かしたくなったからちよこつと借りただけよ」

「ちよこつと借りたって…….そんな軽く…….」

河嶋桃が魂が抜けたように膝から崩れ落ちた。

「いや、相変わらず適当っすね」

角谷杏が少し苦い笑顔で呟く。

「ちやんと先生方の許可はとったからオールOKよ」

蝶野亜美は腕組みをして高らかに言い放った。

「皆さん聞いた通りです。戦車倉庫は密室になっっていないなかった。盗まれてもいなかった。私たちが臨海学校で学園艦を離れている間に蝶野教官が鍵の開いていた戦車倉庫からIV号を借りていった。真相はただそれだけだったんです」

「密室?何のこと?」

全ての元凶である蝶野亜美の言葉に皆が気抜けして、会議室が乾いた笑いで包まれた。

こうして『IV号戦車消失事件』は幕を閉じた。

「まさか西住さんに名探偵の素質があったなんて、完敗だな」

少ししよげながら称える麻子にみほは「いや、たまたまだよ」と照れ笑いを浮かべる。

「でも、良かったよ。誰も盗んだ人がいなくて」

沙織は安堵の表情を浮かべる。

「そうですね。これで一安心です」

華も穏やかに窓の外のIV号を見つめる。

「それじゃあ、戦車も揃った事だし、練習を始めましょう!」

瞳を輝かせ両手を力強く握って優花里が勢い込んでいる。

「西住殿」「みほ」「みほさん」「西住さん」

全員の視線がみほに集まる。

「うん。皆、いつせーのっ」

「パンツァー・フォー!!!」

おわり